

平成25年度

第58回 長野県中学校連合教科研究会

美術科

目 次

I 研究テーマ	1
II 研究の趣旨	1
III 参加校の研究要旨一覧と参加者名、指導者名	1～2
IV 研究問題と協議内容	2～8
V 本年度の研究の反省と来年度の方向	8～9
VI あとがき	9

I 研究テーマ

「生きる力」をはぐくむ表現と鑑賞の活動はどうあったらよいか

II 研究の趣旨

「生きる力」をはぐくむことを念頭に、美術の授業でどのような資質や能力が育っており、また、今後さらに育てなければならない資質や能力はどのようなものであるかを明らかにしたい。各校におけるつける力の決めだしと、つける力をつけるための表現や鑑賞の手だてやカリキュラムのあり方を生徒の具体的な変容の姿から究明していきたい。

III 参加校の研究要旨一覧と参加者名、指導者名

第一分科会

指導者 會田 義昭 先生 (南信教育事務所主任指導主事)		
司会者 藤本 信彦 先生 (長野市立西部中学校)		
記録者 宮澤 康代 先生 (長野市立柳町中学校)		
世話係 鈴木 大三 先生 (附属長野中学校)		
東御市立 東部中学校	レポートなしの参加	斉藤 明子
諏訪市立 上諏訪中学校	レポートなしの参加	早出 優里
伊那市立 伊那東部中学校	表現への思いをふくらませながら、発想・構想の力を高めるための指導のあり方	赤羽 雄太
信州大学教育学部 附属長野中学校	イメージしたものを抽象的にとらえて構想する力を高めるための指導のあり方	鈴木 大三
塩尻市立 塩尻西部中学校	色の違いによって受けるイメージが違うことに気付き、自分の作品のイメージに合った色を選ぶことができるようにする指導のあり方	宮澤 悠美
長野市立 柳町中学校	対象と自分の意図を重ね合わせながら、表現を追求していく生徒の育成	宮澤 康代
長野市立 川中島中学校	もの、ひと、こと とのかかわりから、生徒が個々の見方や感じ方を深めていく美術の指導のあり方	坂本 涼
長野市立 西部中学校	レポートなしの参加	藤本 信彦
松本市立 明善中学校	レポートなしの参加	深町さや香

第二分科会

指導者 高山 顕光 先生 (北信教育事務所指導主事)		
司会者 長崎 至宏 先生 (長野市立裾花中学校)		
記録者 中村 明 先生 (長野市立犀陵中学校)		
世話係 鹿野 耕平 先生 (附属松本中学校)		
箕輪町立 箕輪中学校	対象への見方・考え方・感じ方を広げるための授業づくりを目指して	大日向一恵
上松町立 上松中学校	自分の制作スタイルを見つけるための効果的指導のあり方	前所 優介
組合立 両小野中学校	基礎的・基本的な知識・技能を活かし、生き生きと自分らしい自己表現力を育むための指導・教材のあり方	高野 菊丸
長野市立 裾花中学校	友とかかわりながら、自分らしく表現することに喜びを味わえる授業づくり	長崎 至宏

長野市立 犀陵中学校	レポートなしの参加	中村 明
信州大学教育学部 附属松本中学校	表現主題を基に、作品の構成を比較検討し、新たな表現方法に気付きながら構想を深めていく美術学習の指導のあり方	鹿野 耕平
信州大学教育学部 附属長野中学校	イメージしたものを抽象的にとらえて構想する力を高めるための指導のあり方	羽田 光

IV 研究問題と協議内容

【第1分科会】

- 「戦争を題材にした作品鑑賞による生徒の学び、それに即した題材構想と支援のあり方」「鑑賞題材のカリキュラム内における時間数のバランスの取り方」（川中島中学校）

(1) 研究内容

西洋の代表的な画家の作品を鑑賞し、よさを味わってきた生徒に自分の住む地域の作家や美術作品にも興味関心を持って、そのよさや価値を感じてほしいと考えた。学区内にある上野誠版画館の作品を借りて美術室に展示し、制作の背景を館長さんに聞いた上でじっくり鑑賞する時間をとることで、描かれているモチーフの構図や表情から作者が制作に込めた願いを感じ取れるように構想した。

(2) 協議内容

対話型鑑賞は発問のしかたが難しいが、生徒の意見を吸い上げて、学習課題に着目させていきたい。ねらいによって鑑賞する作品を精選していくことが大切である。

(3) 指導者の先生のご指導

ねらいによって題材の展開も変わるので、ピントがぼやけない数で作品を選ぶこと。鑑賞の扱う領域はたくさんあるので「A表現」と絡めて行くとよい。「自由に見る→共通の視点でもう一度見る→言語活動を意図的に行う」基本の追求過程を大切にしたい。

- 「構成から制作に移る段階の見極めを、一人一人の生徒がどのように判断していったらよいか。」(附属長野中学校)

(1) 研究内容

表現活動において、創造的・総合的な見方や考え方を培い、豊かに発想し構想する生徒の姿を願った。そのために、「母校に残すモニュメント」において、主題や作品が置かれた場所から発想した具体的なイメージを基に石膏による抽象彫刻に表す学習を構想した。主題と置く場所の関係が伝わるかグループで意見交換を行い、試作を置く位置や向き、形を見直す活動を位置づけた活動が示唆された。

(2) 協議内容

主題を大切にしており、そのためのイメージマップ作成は有効な手だてである。マップの作り方も工夫でき、活動できるであろう。作品完成の見極めは友の意見が大きく関わっている。

(3) 指導者の先生のご指導

イメージマップによる構想段階中に、現場を訪れて考えることは生徒の直接体験も大切にする方法である。「発想の種シート」を生徒が作成することで、抽象化の方法を学んでいる。またそれを印刷、配付することで発想を共有することができている。「伝える」ことを考えたとき、意見交換の場を設ける必要性が出てくるので、グループによる意見交換はデザイン、工芸の題材では位置づけたい。

- 「生徒の気づきと創意工夫を引き出す発問や指導はどうあったらよいか」（柳町中学校）

(1) 研究内容

表現テーマを追求し創意工夫を加えた発展的な制作をする生徒の姿を願った。ドライポイントを題材に、相互鑑賞を通して生徒同士が意見交換をする場面や、表現の確かめと修正追求を繰り返す活動を位置づけた。

(2) 協議内容

生徒の創意工夫を引き出す手だてとして、比較鑑賞がよい。気づかせたい内容が現れている作品とそうでない作品など、場面ごとに扱うと効果的である。

(3) 指導者の先生のご指導

導入でえんぴつスケッチとドライポイント作品をそれぞれ鑑賞すると、生徒達はドライポイントのよさに気づく。ドライポイントのよさを教師が理解し、生徒のやってみたいという意欲を引き出していくことが大切である。

- 「色の違いによって受けるイメージを効果的に指導するにはどのような工夫をすればよいか」「自分の作品に抱いているイメージを具現化する過程で、どのような支援が可能か」「色を決められない生徒やイメージをもてない生徒への効果的な支援のあり方」(塩尻西部中学校)

(1) 研究内容

オリジナル絵文字の制作の配色場面で、色の違う図案を比較鑑賞することは、色の違いによって受けるイメージが違うことに気づかせ、自分の作品のイメージに合った色を選ぶことに有効であることを示唆された。

(2) 協議内容

色のイメージを広げたり混色で色を作ったりする力は、ある程度学習や訓練が必要である。また、ドリル的な活動は全体で共有するとよい。

(3) 指導者の先生のご指導

小学校では絵の具を使う一番初めに「色図鑑づくり」を行うことがある。できた色に名前をつけていき、それを絵の具セットの中に入れておくと制作の助けになる。また、比較鑑賞は生徒たちが気づき考えるためのよい方法である。

- 「生徒が表現や鑑賞への思いをふくらませ、意欲的に活動に取り組むために、課題把握の段階でどのように観点を設けることが効果的か」(伊那東部中学校)

(1) 研究内容

漠然としたイメージを徐々に明確にして表現主題を練り上げていくには、多様な視点から美と向き合う経験の積み重ねが必要であると感じた。そこで1学年の授業では、対象や風景に対する多様な視点を持つ姿勢を身につける学習として、自分の思いのままに対象や風景を切り取ることのできる「写真」を取り上げた。実証授業では、選んだものや場所の「よさ」を探り、形、色、空間等から受けるイメージを手がかりにお互いの写真に題名をつけ合う活動を通して、対象や風景のもつよさについて考えを深めたり、新たな観点を見出したりすることができるように構想した。

(2) 協議内容

写真を撮る際、近景にテーマをもってきたり、「虫の目線になって」など角度をつけたりするのもひとつの方法である。題名をつけ合う活動では、参考作品の題名を当てるといった活動によって題名への関心や意欲が高められる。また、題名をつけ合う活動の後、もう一度撮りに行く活動があれば、生徒達の見方や感じ方が深まる。

(3) 指導者の先生のご指導

写真は「見る」ことに生徒を引き込む素材である。よい風景を「見る」、どのように写ったか「見る」、友はどのように撮ったか「見る」ことで生徒たちの感性は磨かれる。さらに語り合うグループ活動によって視点が広がる。鑑賞学習の課題把握では、生徒の気づきを生かした観点の設定や、生徒が作品をより詳しく見たくなるような問いによって見合う活動の目的を設定することが大切である。

【第2分科会】

【協議1】

◆南箕輪中学校の研究報告を受けて、どのような鑑賞をおこなっているか。

1) 鑑賞のタイミングについて

- ・ 1「制作に入る前」参考作品の鑑賞。2「制作過程の中間」お互いの作品を見合う。3「完成後」完成作品を見合う。2の場面では、友への意見を促してもあまり意見が出ない場合が多い。ここではスケッチブックに「友の作品のいいところ」等をメモする程度にとどめておく。中間鑑賞は友にアドバイスをしながら自分の制作に生かすという意味がある。3の場面では、友への意見をしっかり書いてもらう。相互に意見を交換して欲しいときは、書いたものを渡すという活動を行う。この時、付箋を用いると活動が活発になることがある。さらに色をいくつか用意するという工夫も考えられる。赤はアドバイス。青はいい所。といった具合に。

2) 意見交換を行うための手だてについて

- ・ 自分の表したいことが表せているのかを聞くための意見交換では、自分の表したいこと、アドバイスして欲しいところ、自分の今迷っているところなどを最初に書いて、言葉にしておく。

・ 鑑賞の方法について

まずは制作者の意図（主題）を伝えずに鑑賞し、感想を言ってもらう。自分の表現したいことと、他者が自分の作品を見たことで持つ感想の違いに気づくことになる。その違いの擦り合わせをおこなって行く。

◆上松中学校の研究報告から、抽象的な形として表現していくための手だて。

1) 言葉からイメージしたものを形にしていく手立てについて1

- ・ 例えば「ネガティブな形」を抽象的な形として表す。ネガティブな〇〇という視点を提示する。ネガティブな「感触」。触るとそれは「冷たい」「痛い」等の言葉が増えてくる。さらに別の視点からイメージすることを促し、関連する「言葉」を増やす活動を行う。その後いろいろな線や色を提示する。その線や色の中から自身のイメージに合うものを選択する活動を通して、イメージを形として表現して行く。「ネガティブな形」に対するイメージを豊かにすることで形の選択、イメージと形を結びつけることが出来るという実践が紹介された。

2) 言葉からイメージしたものを形にしていく手立てについて2

- ・ 「優しさ」の抽象的な形を考えると、例えば身の回りにある優しいものを想像してみる。優しいもの、母の作るオムライス。それはふっくら丸い形をしている。だから曲線で表そう、という具合に発想していく方法が紹介された。

指導主事のお話1

○私たちが学ばなければならない、かけがえのない両中学校の実践発表である。そして、今日一日の実践発表と協議を貫く、大切な学びがここにあると感じる。

○2つの題材観について

1. 作らせたい作品から考える題材
2. つけたい力から考える題材

1では、こういう題材を扱おうと、こういう力がつくだろうと考えるような題材の構想である。この場合、“こういう力をつける”という意識が薄いと、作品の”出来栄え”に目がいきがちになる。

2では、こういう力をつけるためにこういう題材を扱おうと考える。出来上がった作品の出来のみを観点とせず、その制作過程に学びの機会が設定される。つけたい力を想定したうえで構想される題材の重要性が示唆された。

○現在の中学生在が美術を通してつけたい力は学習指導要領を根拠に、以下の2つがあげられた。

A表現(1)(3)感じ取ったことや考えたことなどを基にした発想や構想する力

A表現(2)(3)目的や機能を考えた発想や構想をする力

この2つのつけたい力、表現は大きく異なる。前者は主に内面を見つめて深める表現。後者は主に他者や社会との関係について理解を深める表現である。

つけたい力が内面を見つけて深めることなのか、他者や社会との関係について理解を深めることなのかによって、活動の内容は自ずと変わってくる。

A表現(1)(3)に関わる力をつけたいと願う場合。鑑賞においては、自分自身の考えを語ることを第一とする。語ることで内面(主題)を深めることができるようにする。聞く側は、自他の作品へアドバイスをすることもあるが、それ以上に、自分の表現にどう生かすかという心で聞くことを大事にしたい。

A表現(2)(3)に関わる力をつけたいと願う場合においては、他者の立場に立って表現を見合うことになる。目的や条件に対してどうかを話し合う学習となる。他者がどう感じるかという他者の見方で考え合うことが大事であり、そのために教師が明確に目的や条件を示す必要がある。

相互鑑賞、意見交換のねらいは自己を深めていくことによって発想や構想の力を伸ばすものと、他者を理解していくことによるものとの両面がある。つけたい力を明確にすることは、効果的な手だてを考えることであり、その実践を明確な観点をもって振り返ることでもある。

【協議2】

◆両小野中学校、自画像としての頭像制作の実践報告を受けて、それぞれが感じたこと。

1) 自画像、自画像という題材について

- ・中学生という時期に自画像や自画像の制作を通して、自分自身の顔を見つめることには、とても意義がある行為だという意見が出た。しかし、顔全体を見つめることに、抵抗を感じる生徒は多い。目や鼻、口などのパーツをよく観察して描く題材では、何となく捉えていたそれぞれの形の構造に気づく面白さなどから、没頭する生徒が多いという。
- ・生徒が積極的に自分の顔を見て、表現したいと思うために
表現したいこと(主題)をある程度言語化しておく必要があるのではないかと。「自分らしさとは何か」「自分とは何か」「どんな場面なのか」。表したいことや、その形のイメージを持つための時間が、必要なのではないかと。
- ・「制作者としての自分」「モデルとしての自分」「制作される作品」の三者の関係を整理することで、それぞれのアプローチの意味や方法が明確になるのではないかと。
- ・立体作品を制作するための手立てについて
立体作品の制作を難しいと感じる生徒は、少なくない。手立てが必要だ。実践では、鏡が用いられたが、それだけでは、見えない部分が多く、頭部を形として捉えられないのではないかと。様々な角度から撮影した写真を用意することなどが必要だろう。

◆裾花中学校、「粹」をテーマとしたマイ手ぬぐいの作品を鑑賞しながら

- ・中学1年生が最初に出会う美術として題材が構想されている。中学の美術と小学校までの図画工作の大きな違いは、テーマ(主題)の表現にある。意欲的にテーマを表現したいと思えるような題材として、

構想された。研究会に持参された完成作品はどれも、作品としての完成度が非常に高いものばかりだった。

指導主事のお話 2

○両小野中学校の実践は、A 表現(1)(3)の内面を追究していく題材である。

- ・「表したいことはどんなことですか」という問いかけがされていたことが大事である。また、生徒が自分の力で表したいことを表現できるように、材料や用具を検討し準備している点も大事にしたい。そして、鑑賞で得たことが自ずと自分の表現に生かされていくようにする指導の研究を引き続き期待したい。
- ・鑑賞においては、自分の見方や感じ方を大切にして、主体的に造形的なよさや美しさなどを感じ取り味わうことが大事である。
- ・A 表現(1)イは「主題などを基に、全体と部分などを考えて、想像的な構成を工夫し、心豊かに表現する工夫をする。」量感など、内側から張り出す感じと表したい主題とを結びつけていくようにしている指導であった点が大切であると思う。

○裾花中学校のマイ手ぬぐい制作は、A 表現(1)(3)か、A 表現(2)(3)か。

- ・リピテーションやリズムなどの構成美の要素を用いて制作されていて、用途性のあるマイ手ぬぐいの制作は、これまではデザインの領域の題材とされてきた。デザインというと、目的や機能を考える A 表現(2)(3)の指導項目が想定される場合が多いが、この実践は A 表現(1)(3)に重きが置かれている点に注意したい。この題材観によって、生徒が自分の表したいこと(表現主題)をしっかりと持てる指導が生きている。授業における相互鑑賞(自然な話し合い)では、友のアイディアのよさに気付き、自身の制作に生かすことを促している点に学びたい。
- ・「Sさんのグラデーションはきれいだと思った。自分は蜘蛛をカッコよくしたいと思っていたから、黒青のグラデーションをして、アクセントがでるように工夫してみた。蜘蛛の足が切れて大変だったけど、蜘蛛の感じは出せたと思う。」という生徒の振り返りに学びの具体を見ることができる。
- ・主題などを基に、つまり、自分の思いを練り上げて表現していくことで、自己を実現していくこと。対象(粋な日本の手ぬぐいのデザイン・友の制作した作品)のよさや美しさをどのように捉え、どのような主題を持ち、それをどのように表すかという構想を練っていくことが、本題材のねらいであった。裾花中学校の研究は、内面を見つけて深めるための表現を一貫して目指した活動が行われている所に、大きな価値を見ることができる。

【協議 3】

◆附属長野中学校の実践

1) 発想の方法を伝達する、という側面

- ・長野中学校の研究では、表したい感じを抽象的な形として発想して行く方法が紹介されている。「イメージマップ」「発想の種シート」「針金の活用例」等。制作の各工程において、発想の方法が用意されている。

◆附属松本中学校の実践

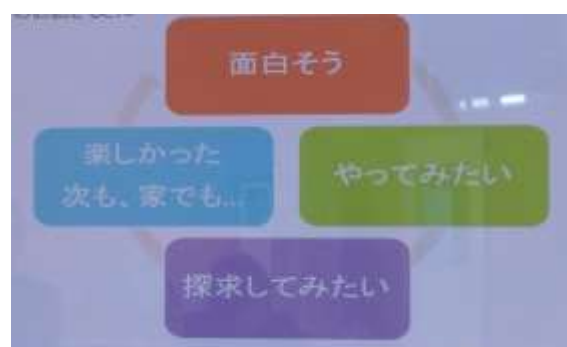
1) グループ学習(制作)について

- ・松本中学校の題材では、4~5人のグループをつくり、制作した。題材の特性上、1人で制作することが不可能なので、自然とグループ制作となる。生徒は、自分の考えた作品の構想を伝え、協力してもらった上で制作しなければならない。
- ・同じような主題を持つ者同士をグループとするか。あえて主題の異なる者同士をグループとするか。
- ・普段あまり関わりのない者同士をグループとするか。仲のよいもの同士をグループとするか。

- ・グルーピングを考える上で考慮するポイントがいくつかあることがわかった。

指導主事のお話3

- ・A表現(2)(3)の相互鑑賞、他者や社会との関係について理解を深める。
- ・長野中学校の実践は、A表現(2)(3)の学習指導における相互鑑賞を行っていたと言える。生徒たちは自分が表したいことが、しっかり他者に伝わっているのか、聞きたいという動機を持っていた。それは、生徒が自分の力で追求していくための手立てがしっかり準備されていたからだ。まず、イメージマップ。何を、表現したいのかという部分を明確にするための手立てだ。発想の種シートは、どうやって表現するのかという方法のための手立て。iPadは作品を設置する環境の意匠性を考える上で必要であった。また自分の考えを持ち、まとめるための時間を十分にとっていた。このことが意欲的に意見を求める生徒の姿につながっていったのではないかと。自身の内面にある願いと、他(社会)との間に起こるズレを互いに歩みよりながら解消していくという問題解決が行われていた。またこの研究では、指導のねらいが明確であって、有効な実践の振り返り方がされている。



- ・松本中学校の実践はA表現(1)(3)の学習指導に関わる実践だ。ここで、発想を作品にしていくために、生徒が自分の力で追求できるように準備された手立ては、構成、タイミング、アングルの3点を軸にした学習課題だった。発想を作品にして行くために、明確にして行くべきことが、上記の3点として要点的に分かりやすくまとめられている。
- ・生徒にとって追求しやすい題材とは右図のような題材ではないか。探求してみたいというような思いになる題材だ。例えば、松本中学校の生徒が水をかぶっていても表現したいと思えるような題材である。生徒が楽しいと思えるような題材、しかし重要なのは楽しさの質だ。出来上がった作品のみが重要なのではなく、質の良い探求そのもの楽しさを見いだせるような題材が必要だ。

V 本年度の反省と来年度の方向

◎ 本年度の反省

項目	内容
◎本年度の研究テーマについて	<ul style="list-style-type: none"> ・「生きる力」を美術でどのように取り入れ身につけさせていくか、他の先生方の実践を聞いてよかった。 ・「生きる力」は、自分で表現し、選択することにつながる所以需要だと思う。 ・抽象表現は、3年生の課題だと思う。抽象化の過程での連想、言語化は有効だと感じた。
◎研究の主な内容と研究の成果について	<ul style="list-style-type: none"> ・主題を表現する工夫に焦点をあててきたが、主題をどのようにしてもたせるかを、今後考えていきたい。 ・子どもたちが、制作活動をしていく中で、幅広い色の中から自分が表現したいものに合う色を考え、選択するためには、どのような手がかりが必要か考えてきた。有効な手だては見つからないが、研究会で出された意見を参考にし、学校に戻って実践してみたい。

○研究の方法や経過について	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題を解決する手だてについて、他の先生方の実践を参考にしながら、いろいろな方法を考えていきたい。 ・たくさんの方の見方や考え方、指導法を学ぶことができるのでよい。 ・地域の美術館「丸山晚霞」と連携している。身近な風景が絵画になっている。地域のよさを再発見し、自己もよさを探す。
○研究会当日の運営について	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数ではあるが、それゆえに意見が出しやすく、参考になる点が多かった。 ・レポートの本数もちょうどよい。一つ一つの実践に対して指導者の先生から丁寧なご指導をいただけて、とても勉強になった。
○研究集録等の Web ページ掲載について	<ul style="list-style-type: none"> ・適当である。
○本年度運営全般について	<ul style="list-style-type: none"> ・早め早めにメール等で連絡をいただけたので、当日までの準備がスムーズに進めることができありがたかった。

◎ 来年度の方向

○来年度の研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領に新たに加えられた言葉について考えていきたい。 ・本年度の研究をさらに深めていきたい。 ・継続的に構想力や表現主題を練り上げる力をつける授業を考えていきたい。 ・具体性がある分りやすいものがよい。
○来年度の研究の趣旨	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人一人の追求していく力と、そのための主題設定はどうしたらよいか。 ・制作と鑑賞のつながりを深めるような授業展開を仕組めるような方法を考えていきたい。 ・本年度つくった美術館との連携を深めたい。
○来年度の研究の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・地域にかかわる美術の研究。 ・カリキュラムの検討 ・学芸員さんに、1回ではなく2～3回とともに授業を作れたら。
○その他、改善したい点	<ul style="list-style-type: none"> ・教科アンケートの書き方が難しい。レポート形式や研究会の内容などについてのアンケートにさせていただけるとありがたい。

VI あとがき

晩秋の一日、県下各地からお集まりいただいた先生方には、実践レポートや使用した資料などをもとにして、数多くの提案や討議をしていただきました。

本年度の研究会では、限られた指導時間の中にあっても、資料や題材展開、表現主題のもたせ方を工夫し、実践されているレポートが多く見られました。また、参考作品をお持ちより頂き、それぞれの学校の素晴らしい実践に学ばせて頂き、各校の生徒の実態に即して、つける力を明確にしながら題材を構想し取り組まれていることがよくわかりました。討議においては、多くの意見や質問が出され、それぞれの実践のよいところを学んでいこうとする先生方の熱意が感じられました。来年度もこのような熱心な研究会にしていきたいと考えております。

終始適切で温かいご指導をいただきました南信教育事務所主任指導主事 會田 義昭 先生、北信教育事務所指導主事 高山 顕光 先生には心から御礼申し上げます。

また、研究会を実りあるものにしてくださった司会の長野市立西部中学校 藤本 信彦 先生、長野市立裾花中学校 長崎 至宏 先生、細かく記録をとりお忙しい日程の中で研究のまとめにご苦労いただいた、記録の長野市立柳町中学校 宮澤 康代 先生、長野市立犀陵中学校 中村 明 先生、数々の実践を携え熱心に協議していただいた参会の先生方に心から感謝いたします。ありがとうございました。

委員長 鈴木 大三
副委員長 鹿野 耕平